

驚きは、人類最上の部分である。

ゲートは、人類の到達し得る最高のものは驚きであると言っています。

天上のいちばん美しい星を取ろうとしたかと思うと、地上のいちばん深い楽しみをきわめようとするのだと。スイートヴィラには、安息だけでなく、この驚きをしのばせたいと、それぞれの棟に五感をゆさぶるブックシェルフを設けました。

言うならば、独り占めできるギャラリー。

ひとつの棚に、隔たっているかに見える二人の作家の作品を併置して、その距離をドラマツルギーとした激しいドラマを引き出します。

サロンの棚には、この15の棚のキュレーションをした新見隆の『人形譚』、太古の記憶と響きあう近藤高広の23の陶彫も展示されて、点綴された空想美術館さながら。

どの棚も、来るべき知と美と驚嘆を受け入れて、

さまざまに変容します。

その名も燦架、生きる欲びにきらめく地平へ誘います。

スイートヴィラの客室における、15の棚の展覧会。

「ゲーテの目、あるいは舞踊する庭」

庭をめぐる私どもの肉体は、自然を呼吸し自らの血肉に滋養するために、草木や土、風をさまざま「目」で愛撫する。目は、庭をめぐる神だ。

それはまさしく、疾駆する舞踊の神、ギリシャのディオニソス神の如く、庭という自然の類型（タイポロジー）、モデルを巡るダンスでもある。

ニュートン光学的な色彩学、色は物質に反射する光のスペクトルである、という常識に真っ向から敵対したロマン派の詩人ゲーテは、色が物質に内在すると考えた。（註1）

かの『ファウスト』のメフィストテレスのように、私どもの「目」は単なる鑑賞を超えて、今、那須の庭の上空高く飛翔する。

現代に傑出した才能を「出会させた」この十五の棚によって、滞在者もまた、鑑賞／享受を超えた、新たな創造の舞台の踊り手となる。

註1——ゲーテ色彩学については、シュタイナー派の写真・映像作家である能勢伊勢雄さんによる、瞠目すべき、アートビोटープ那須「山のシューレ」の講演と、畏敬する高橋巖先生の『ディオニソスの美学』（春秋社、2005）『シュタイナー哲学入門——もう一つの近代思想史』（岩波文庫、1991）『神秘学入門』（筑摩書房、2000）などから、すべて学んで借りた。

「スイートヴィラ客室のための、15の棚」

棚は、それぞれ二作家の作品の組み合わせ「合わせ技」から成り、テーマに沿って、表のギリシャ舞踊神「ディオニソス」と、裏のローマ舞踊神「バックス」の二対の組み合わせが、別々の二部屋に配置されている。それらは互いに補完し合うが、一度に両方が見られることはない。全十五作家による、十五の棚。

その一 「黙示録、その自然観」(ディオニソス、影) — 6号室
松本陽子(平面、アクリル) VS 小池頴子(陶芸)

その二 「黙示録、その自然観」 — 2号室
(バックス、=舞踊神(ディオニソス)のローマ名、影の裏側)
小池頴子(陶芸) VS 松本陽子(平面、アクリル)

現代日本の美術界、その最先端を牽引する平面の作家、抽象画家、松本陽子と、自然に触発された、柔らかく叙情的(リリカル)な造形を追求して定評ある小池頴子のカップル。

松本による、黙示録的な深みを持った宇宙的躍動の画面に対して、自然の「身体」から成長し湧きあがって来る小池の静謐が会おうことで、静やかな瞑想のひとつときを楽しんでいただきたい。

その三 「音と香り——共感覚の向こう側」(ディオニソス、影) — 11号室
関根直子(平面、鉛筆) VS 長谷川さち(彫刻)

その四 「音と香り——共感覚の向こう側」(バックス、影の裏側) — 14号室
長谷川さち(彫刻) VS 関根直子(平面、鉛筆)

ラスコー洞窟画や、抽象表現の巨匠マーク・ロスコに触発され、ますます空間の重層や深化をみせる関根直子の鉛筆画の平面と、生活空間に感じられる「気配や香り」を恬淡と石に刻んできた異色の石彫家長谷川さち、気鋭の出会い。

関根の、自然そのものが縦横に飛翔し呼吸するような軽快なコラージュは、走り去る時の音を聴かせ、長谷川の石の鑿音から薫るような、高い香気の交わりを感じてもらいたい、「音を嗅ぐ」共感覚的な趣向。

その五 「表現主義と舞踊」(ディオニソス、影) —1号室
横尾龍彦(平面、ミクスメディア) VS 高橋禎彦(ガラス)

その六 「表現主義と舞踊」(バックス、影の裏側) —5号室
高橋禎彦(ガラス) VS 横尾龍彦(平面、ミクスメディア)

ドイツで活躍し2015年に没した、神秘主義者にしてシュタイナー派の美術家横尾龍彦の「気」の霊画と、現代吹きガラスの第一人者、ジャズの風をもたらすマエストロ高橋禎彦との競演。

見えない霊的分子、シュタイナーが「エーテル体」と呼んだ「気」を禅で表現した横尾の舞踊画面と、自在で軽やかな音楽を身体で感じて「踊り出すような」高橋のガラス表現を楽しんでいただきたい。(註3)

その七 「宇宙霊、成長する庭」(ディオニソス、影) —12号室
さかぎしよしおう(立体) VS 留守玲(鉄溶接)

その八 「宇宙霊、成長する庭」(バックス、影の裏側) —16号室
留守玲(鉄溶接) VS さかぎしよしおう(立体)

留守は工芸、さかぎしは現代美術、という領域の違いがありながら、ともに複雑で独特な、鉄の粒を溶かした溶接、磁土の垂らし混みと積層、乾燥、焼成、と、素材の限界に向き合う、実力作家の出会い。

「成る」こと、「生まれる」ことへ、直向きに対峙して評価の高い二人の、「造形」を超えた、見えない「宇宙芸術霊」への信頼を嗅ぎとっていただきたい。(註4)

その九 「装飾と肉体」(ディオニソス、影) —7号室
内田あぐり(日本画) VS 川端健太郎(陶芸)

その十 「装飾と肉体」(バックス、影の裏側) —18号室
川端健太郎(陶芸) VS 内田あぐり(日本画)

「エロチシズム」とは単に言い切れないような、「身体」の陰に宿る、内面的な造形を追ってきた二人。現代日本画の最前線を、装飾=肉体のぎりぎりの闘ぎ合いで追う内田の舞うように多層な空間。自在な生命器官的形と、多彩な色彩の煌めきに、陶芸の悦楽、見る=触る、楽しみの境地を感じさせる川端。二人ながらの、生命感の乱舞を満喫してもらいたい、と思う。

その十一 「楽園への帰還」(ディオニソス、影) —10号室
真島直子(ミクスメディア) VS イイノ・ナホ(ガラス)

その十二 「楽園への帰還」(バックス、影の裏側) —17号室
真島直子(ミクスメディア) VS イイノ・ナホ(ガラス)

大胆可憐な巨大鉛筆画(最近は油絵具も多様する)で、パリ-東京を拠点に国際的に活躍する画家、オブジェ作家真島直子に、詩的で涼やかな物語を感じさせる彫刻的ガラスで大人気のイイノ・ナホ。

タイトル「ジゴクラク」は、真島の造語=「地獄&極楽」だが、土俗的風合いに満ちた真島の、モダンで都会的なイイノの、それぞれの巫女が産みだした楽園が、那須で交差する。

その十三 「故郷喪失(ディアスポラ)、異界の旅」(ディオニソス、影)、 —3号室
内田有里(写真) VS 徳丸鏡子(陶芸)

その十四 「故郷喪失(ディアスポラ)、異界の旅」(バックス、影の裏側) —8号室
徳丸鏡子(陶芸) VS 内田有里(写真)

チェジュ島、対馬など、複雑で困難な歴史を持った風景を、内省的なモノクローム写真で追ってきた内田。日本工芸の伝統「生を言祝ぐ」、花々や生き物の乱舞する祝祭的造形を追求してきた焼きもの作家、徳丸。

内田の静謐な黒い画面、その深みには人間の魂と風土と歴史の魂が交わりがあり、徳丸の華やぐ白にもまた、私どもの日日の心模様の多彩が映っている。

その十五 「黒と黒、クールな庭」 —15号室
樋口健彦(陶芸)

樋口は、「器」にこだわらず「焼きもの」にこだわるという意味で現代工芸の異端児。建築や環境へと開かれた、彫刻的な仕事で評価が高い、中堅実力作家。

見る者の観想をそくす黒い小宇宙は、多彩で交響的なポリフォニーを感じさせ、「黒」の無限な光彩を信じる樋口の、ユーモアと諧謔に満ちた、生讃歌を感じとっていただきたい。

参加、全十五作家による、十五の棚。

キュレーション：新見隆

武蔵野美術大学教授・アートビオトープ那須文化顧問・イサム・ノグチ庭園美術館学芸顧問